

## みんなの童話

### ぼくの素敵な初夢



初日の出は、権現山（ごんげんやま）で拝もうと去年から計画していた。ぼくたち阿久比町にある、新美南吉「ごんぎつね」ゆかりの権現山にごん狐がいたことで全国に知られている。権現山の初日は、元旦早々の朝寝坊で失敗した。初失敗、初後悔。わが家のルールで、その日のスタートの「起床」は自分の意志と責任でしなければならぬ。

お鏡もちの飾られた台所で、父と母、妹が笑っている。初家族、初笑顔である。ぼくもとびきりの笑顔で新年の挨拶をした。  
 「お兄ちゃん、初日を拝んだ？」  
 「もちろん。素敵だったよ」  
 「ずるい。早々初うそをついて」  
 「本当だよ。権現山で、ごん狐に会ったんだよ。夢の中だけだね」  
 「うわぁ、素敵な初夢が見られて、お兄ちゃん、よかったね」

妹が素直なかわいい顔で笑った。

「公一も今年は中学生だな」  
 父がにこにこ顔でぼくを見た。

「はい。阿久比中学ピカピカの一年生。全力でがんばる所存です」  
 ぼくの初演説に家族が拍手した。

年賀状が配達された。家族全員で九八枚。うちぼく宛が一八枚。

「小学生にしては多いわね」

「それだけ友達が多いってわけだ。公一は幸せものだ」  
 父母が満足そうにうなずいた。

「中学は勉強がんばるぞ」  
 （健）

「部活は落語部に入って、みんなを笑わせるぞ」  
 （大幹）

「養護の真子先生、好き。そろそろアタックしようかな」  
 （ユウ）

賀状の絵文字が躍動して楽しい。

だが安子さんからは来ていない。阿久比高校三年の森野安子さん

は昨年からのぼくのカノジョだ。

朝、登校時など大きな声で「オハヨウ」と挨拶をしてくれる。

去年の文化祭の俳句大会で、ぼくはみごと入賞を果たした。

#### 新春の空に「安」の字描きごっこ

「二句目「安」が、安心、安全、平安、安泰と職員室でも話題になったぞつだが、正解は安子さん

の「安」。誰も分らなかったが、安子さんだけは気づいて入賞のお祝いにチョコ四箱をもらった。

その安子さんから賀状が来ていないので、ぼくは落ち込んだ。

だが、ぼくは「エイツ」。  
 すぐに立ち直った。

高三のカノジョは受験で賀状どころではないかも知れない。あるいは歳末ぎりぎりに投函したとして

たら明日に届く可能性もありた。ぞつだ。待つことにしよう！

お雑煮を食べていると急におばあちゃんに会いたくなった。

ぼくの大好きなおばあちゃんは今、隣の大府市に住んでいる。

八十八歳。米寿である。だが認知症とガンで寝たきり。家族の顔

も分らないが、ぼくのごときは、はつきり憶えている。伯父さんは「余命半年、今年中はおつまい」と言っているらしい。

おばあちゃんの家の松の木が見えた。ぼくは走りに走った。

「おばあちゃん、オメデトウー」  
 「公一かい。おめでどうさん……」

すぐになつかしいおばあちゃんの声が聞こえたので安心した。

「ヘリコプターで飛んで来たのか」  
 「いや、走って来たんだよ」

「へーえ八時間も走って、公一はすごいねえ。六年後の東京オリ

ピックに出るといい。おばあちゃん必ず応援に行くからね」  
 おばあちゃんは一息懸命に話

のだが、声が小さく、弱々しい。  
 ぼくはフトンにもべりこむと、

小さくなってしまったおばあちゃんの体をやさしく抱いた。

「おばあちゃん、くさいだろっつ」  
 ぼくはあわてて首を振った。

正直に言うと、はく息やおむつのにおいで、くさかった。だが、

いやではない。おばあちゃんの、あのなつかしく、やさしい匂いだ。

「おばあちゃん、認知症だね、間もなく死んでしまう……。お

ばあちゃんのみまで生きておくれ」  
 「死ぬなんて、だめた。いやだ！」

「公一。人間はみんな、いつかは死ぬ。必ず死ぬんだよ。人生は二

度ないからね。だから楽しく、元気に、やさしく生きて欲しい……」

ぼくは、もつ言葉がなかった。

おばあちゃん、大好きだよ！  
 これから先、おばあちゃんの病

気がどう進行していくか、小学生のぼくには分らない。

「だが、おばあちゃんをぼくが、守るからね」

ぼくは、おばあちゃんを抱きしめながら心の中で何度も叫んだ。

阿久比創作童話の会「しろやま

講師 堀尾 幸平